

教科書選定 行き過ぎた政治介入に疑問

朝日新聞 2013年11月13日

さいたま総局 池田拓哉

東京都や神奈川県教育委員会が各校の選定を押し戻した実教出版の高校日本史教科書。埼玉県では、この教科書問題に横やりを入れたのは、教委ではなく県議会だった。

教壇に立つ先生が選び、県教委も採択したのに、やり直しを求める決議が10月、自民党など保守系議員の賛成多数で可決されたのだ。

問題にされたのは、国旗掲揚や国歌斉唱について、脚注にあった「一部の自治体で公務員への強制の動きがある」との記述。県議たちは「(公務員にとって) 強制ではなく義務」と繰り返し、県教委の採択を覆そうとした。

2都県の教委も問題視した箇所だが、政治介入は教育の中立性を脅かす。県議会文教委員会では「(執筆者の所属は) 共産党系の団体」「この教科書で(学んで)は、まず自民党支持者にならない」との発言まで飛び出した。

県議には県政に関する事柄を広く調査する権限がある。しかし、この教科書を選んだ8校の校長を文教委に呼び出し、選定の理由を問い詰めたことは、学校現場全体に及ぶ萎縮効果を狙ったとしか思えず、明らかにやり過ぎと言えるだろう。

校長らは「図表がふんだんに使われ、授業を進めやすい」などと説明し、県教委は「各高校の判断を尊重した」と述べた。すると県議らは「県教委には自主性がない」と攻撃した。

これにも首をひねった。

県教委は教科書採択の前から、国旗、国歌に関するすべての教科書の記述を紹介する資料集の作成に取りかかっており、その資料集も使って生徒を指導することを採択の条件としていた。決して「丸投げ」ではなかった。

現場の選択を尊重し、あわせて生徒が多様なものの見方に触れる機会を保障しようという、妥当な判断だったと思う。一方、県議らは、今後すべての日本史教科書を専門家とともに点検する構えをみせる。自らの考えと異なる記述があれば、やはり排除に躍起になるのだろうか。

決議を受けて県教委は臨時会を開き、採択を変えないことを確認した。筋を通した形だが、今回の騒ぎが来年以降の教科書採択に影響を及ぼす可能性は否定しきれない。

教科書は、生徒に一番近いところにいる教員が責任を持って選ぶのが一番良いはずだ。一部の政治家が「民意」の名の下に度を過ぎた介入を続ければ、それこそ「強制の動き」になりかねない。

(いけだたくや さいたま総局)